

National Center for Global Health and Medicine

NCGM

国立研究開発法人
国立国際医療研究センター



<https://www.ncgm.go.jp/>



Think for World, Think for Human

世界に調和を。すべての人々に健康を。

長年、わが国は、国際社会の調和ある発展と人道的配慮という理念の下に、開発途上国に対する援助を積極的に行ってきました。医療分野における協力をさらに進めるために1979年、厚生省（現厚生労働省）は「医療協力は、開発途上国の人々にとって人間生活の基本的要求に直結する最も社会的効果の高い人道的支援の一つであり、その充実強化のため国際医療協力にかかるセンターを設置する必要がある」と考え、幾多の経緯を歩み、1993年10月に、「国立国際医療センター」が創設されました。そして、2010年4月、独立行政法人「国立国際医療研究センター（NCGM）」と組織改編され、2015年4月には研究開発の成果の最大化を目指す「国立研究開発法人」として位置づけられました。私たちの活動の目的は次のとおりです。国際的な対応が必要とされる感染症やその他の疾患の診察と治療を行うこと。これらの疾患医療分野における国際協力に関する調査研究、医療専門家の派遣、技術者の研修などを総合的に行うこと。そして、国立高度専門医療研究センター（ナショナルセンター）として、わが国の医療分野における国際貢献の拠点になること。これまでも、これからも、NCGMの変わらぬ願いです。

目次

03 ミッション(3つのG)/理念・基本方針	15 国際感染症センター	29 糖尿病研究センター
04 理事長メッセージ	16 AMR臨床リファレンスセンター	30 肝炎・免疫研究センター/メディカルゲノムセンター
05 沿革	17 人間ドックセンター	31 国際医療協力局
07 NCGMが過去に経験した健康危機対応	18 脳卒中センター/がん総合診療センター	33 グローバルヘルス政策研究センター
09 組織図	19 看護部	34 グローバルヘルス人材戦略センター/ Global Health & Medicine
10 施設インデックス	20 国際診療部/バイオバンク	35 国立看護大学校
11 センター病院	21 臨床研究センター	37 アクセス
13 救命救急センター	23 国府台病院	
14 エイズ治療・研究開発センター	27 研究所	



MISSION & PHILOSOPHY

NCGMが世界にもたらす「3つのG」

Global health contribution

1918年のスペイン風邪、そして2020年の新型コロナウイルス感染症など、NCGMは国内だけでなく世界中の人々の健康を視野に入れた保健医療活動や研究をいまも積極的に展開しています。グローバルヘルスへの貢献を通して、世界に調和をもたらしたい。私たちの願いです。

Grand general hospital

日本を代表する総合病院として、あらゆる疾患や病態に対応できること。それが、私たちの誇りであり、責任です。時代に寄り添い、未来を見つめて、NCGMはエイズや肝炎などの感染症・免疫疾患、がんや脳卒中、これからますます高齢化が進むわが国の健康を支えます。

Gateway to the Precision Medicine

日本の最先端医療はここにある。医療高精度ゲノム医療、AIを活用した医療など個別化医療、高度先進医療の研究拠点を目指しています。エイズや肝炎新薬の開発、1型糖尿病に対する膵島移植、マラリアなどの熱帯病の診断や治療法の開発などの研究開発に役立ちます。

国立国際医療研究センターの理念

国立国際医療研究センターは、人間の尊厳に基づき、医療・研究・教育・国際協力の分野において、わが国と世界の人々の健康と福祉の増進に貢献します。

- ①世界に誇れる最善の医療と研究・教育を目指します。
- ②明日を担う優れた医療人の教育と育成に努めます。
- ③医療・研究・教育・国際協力の成果を広く社会に発信します。
- ④医療協力を通じて国際社会との架け橋になります。

センター病院・国府台病院の理念・基本方針

国立国際医療研究センター病院・国府台病院は、最善の総合医療を提供し、疾病の克服と健康の増進を通じて社会に貢献します。

- ①診療と研究を統合し、患者の立場を尊重した医療を実践します。
- ②高度で先駆的な専門分野の連携に基づく医療を提供します。
- ③相互の信頼に支えられたチーム医療を推進します。
- ④安全で効率的な医療を提供し、その成果を広く社会に発信します。
- ⑤広い知識を有する良質な医療人の教育と育成に努めます。

研究所の理念

国立国際医療研究センター研究所は、先駆的な基礎研究・橋渡し研究・臨床研究を活発に推進し、疾病の克服と健康の増進を通じて社会に貢献します。

国際医療協力局のミッション

国際医療協力局は、地球上のすべての人々が健康な生活を送ることが等しくできるような世界を目指し、低所得国をはじめとする世界の保健向上のために専門性を提供し、また、わが国にその経験を還元します。

患者さんの権利

国立国際医療研究センター病院は、国の定める国立高度専門医療研究センター並びに特定機能病院として、患者さんの人格を尊重し、患者さんの自己決定を支援して、相互の信頼に基づく最善の医療を提供します。

理事長メッセージ

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター

理事長 國土 典宏

NCGM 国立国際医療研究センターは、明治元年以来の長い歴史を有し、現在はナショナルセンターとして病院のほか、臨床に直結した基礎医学研究、国際医療協力、国立看護大学校に代表される人材育成と多彩な機能を果たしています。その総合的かつ広範な活動範囲は「3つのG」に集約されます。最初のGはGlobal health contributionのGで、1980年代の南米ボリビアでの医療協力に始まり、これまでのべ134カ国に4,500名を超える職員を派遣してきました。アジア・アフリカを中心に各国の健康保険制度、母子保健、看護師認証制度など医療政策全般に関わる支援を行っています。

二つ目のGはGrand general hospital総合病院のGです。NCGMにとってエイズや肝炎などの感染症・免疫疾患、糖尿病・代謝疾患、児童精神医療等は得意分野ですが、がんや脳卒中をはじめ高齢化が進むわが国のすべての疾患や病態に対応できる総合病院として機能しています。三つ目のGはGateway to the Precision MedicineのGで、特にゲノム医療ではバイオバンクで多くの疾患のサンプルを臨床データとともに系統的に保存し研究開発への利活用を図っています。

2020年1月に始まった新型コロナウイルス感染症に対しては感染症危機に対応するナショナルセンターとして、PCR検査スポットの開設、中等症・重症患者の高度医療、新薬や回復者血漿療法の開発、軽症者のホテル滞在支援、クルーズ船の感染クラスター対策など全方向の対応をしました。特に重症者の治療や治療薬の治験では高度医療を行う総合病院としての能力が存分に発揮されました。また、研究所ではバイオバンクを活用したコロナ重症化因子の解析や新型コロナウイルスを標的としてデザインされた新規薬剤や回復者血漿療法、ワクチンの開発も行っています。

NCGMはこれからも感染症等の健康危機に対応しながら、総合病院と研究所を密接に連携させた高度医療と研究開発、人材育成、国際協力に取り組みたいと思います。

PRESIDENT'S MESSAGE

SINCE 1868

150年を超える歴史が育む医療



現在地に移転(1929年)



国立東京第一病院 正門



国立病院医療センター

NCGMの沿革と未来

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター(NCGM)は、1868年(明治元年)10月に東京日比谷の山下門内に設置された兵隊假病院にそのルーツを発し、1929年(昭和4年)現在の戸山地区に移転しました。戦後、厚生省(現厚生労働省)に移管され、国立東京第一病院として再出発し、長らく“東一”の名称で皆様に親しまれました。1993年(平成5年)10月、国立病院医療センターと国立療養所中野病院の統合により、国際医療協力推進の中心的役割を担う施設として4番目のナショナルセンター「国立国際医療センター」が創設。2008年(平成20年)には組織再編成を行い、国立精神・神経センター 国府台病院は「国立国際医療センター 国府台病院」として新しくなりました。そして2010年(平成22年)、独立行政法人 国立国際医療研究センターとして組織改編の下、高度先進医療をさらに追求する新たな総合病院が出発しました。さらには2015年(平成27年)、国立研究開発法人 国立国際医療研究センターとなりました。NCGMは、センター病院、国府台病院、研究所、臨床研究センター、国際医療協力局、国立看護大学校など多様な組織を有し、感染症・免疫疾患並びに糖尿病・代謝疾患等に関する研究や高度総合医療を提供するとともに医療の分野における国際協力や医療従事者の人材育成を総合的に展開しています。新型コロナウイルス感染症に対する国内の最前線拠点として、これからも、疾患の予防や先進的な治療にかかる研究開発を、世界に、未来に向けて、強く推し進めていきます。

HISTORY OF NCGM

1868	1871	1873	1929	1945
明治元年 10月	明治4年 7月	明治6年 5月	昭和4年 3月	昭和20年 12月
兵隊假病院を開設	本病院が置かれる	陸軍本病院と改称	現在地に移転	厚生省(現厚生労働省)に移管、国立東京第一病院となる

国府台病院

1872	1899	1936	1945	1987
明治5年 3月	明治32年 10月	昭和11年 11月	昭和20年 12月	昭和62年 4月
東京教導団兵学校寮病室として創設	国府台衛戍病院と改称	国府台陸軍病院と改称	厚生省(現厚生労働省)に移管、国立国府台病院として発足	国立精神・神経センターに組織統合

国立病院医療センター

1947	1954	1974	1986	1988
昭和22年 9月	昭和29年 7月	昭和49年 4月	昭和61年 10月	昭和63年 4月
附属看護学校が開設される	日本初の人間ドックが発足	国立病院医療センターと改称、臨床研究部が設置される	国際医療協力部が設置される	エイズ医療情報センターが設置される

国立療養所中野病院

1920	1942	1947	1967
大正9年 5月	昭和17年 7月	昭和22年 4月	昭和42年 4月
東京市療養所	東京市中野療養所	厚生省(現厚生労働省)に移管、国立中野療養所となる	国立療養所中野病院と改称

国立国際医療研究センター

2008	2008	2010	2010	2012	2012	2015	2016	2016	2018
平成20年 4月	平成20年 10月	平成22年 4月	平成22年 10月	平成24年 5月	平成24年 11月	平成27年 4月	平成28年 4月	平成28年 5月	平成30年 10月
国立国際医療センターに組織統合	肝炎・免疫研究センターを設置	独立行政法人 国立国際医療研究センター組織改編、糖尿病研究センター、国際臨床研究センター設置	センター病院に3次救命救急センター設置	国際疾病センターを国際感染症センターと改称、国際臨床研究センターを臨床研究センターと改称	センター病院が特定機能病院に承認される	国立研究開発法人 国立国際医療研究センターと改称、国際医療協力部を国際医療協力局と改称	メディカルゲノムセンターを設置	センター病院に人間ドックセンターをリニューアルオープン	創立150周年を迎える

国立国際医療センター

1993	1997	2001	2003	2004
平成5年 10月	平成9年 4月	平成13年 4月	平成15年 4月	平成16年 10月
初代総長・高久史麿就任、国立国際医療センター創設	エイズ治療・研究開発センター開設	国立看護大学校開校	特定感染症指定医療機関に指定	国際疾病センター開設

国立国際医療研究センター病院中央棟完成(2010年8月)



国立療養所中野病院



国立国際医療センター(2000年代)



森鷗外陸軍軍医学校校長時代の机



森鷗外
OHGAI MORI
(1862 - 1922)

NCGMと森鷗外

森鷗外は、1862年に津和野藩の御典医を務める森家の長男として出生、幼少の頃より大変頭脳明晰で秀才の誉れ高く、1881年7月に19歳で東京大学医学部を卒業後、同年12月から陸軍軍医として、センター病院の前身である東京陸軍病院に約半年間勤務しました。NCGMは創立150周年を記念し、森鷗外に「特別名誉総長」の称号を授与し、その功績を後世に伝えるため、銅像を制作しました。

NCGMが過去に経験した健康危機対応

さまざまな経験のもと、築いた確かな知識で、多様化・複雑化する健康危機に的確に対応

NCGMは、1979年のカンボジア難民キャンプへの医療援助を皮切りに、日本国内はもちろん、諸外国で発生した災害や感染症対策に緊急援助隊を送るなど、世界を舞台に活動しています。2000年代初頭には中国やベトナムのSARS流行制圧への支援を行い、医療協力にとどまらず、各国の健康保険制度(UHC)、母子保健、看護師認証制度など医療政策全般に関わる支援を行いました。これまでにアジアやアフリカを中心にのべ134カ国に4,500名を超える職員を派遣しており、2020年には新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の対策支援として多岐にわたる活動を行っています。



1979 | カンボジア難民医療援助



カンボジア国内の内戦と食糧危機により、50万人以上の難民が発生しました。隣国タイとの国境地域に難民キャンプが設営され、日本政府は1979年から難民救援医療を開始しました。当時の国立国際医療センター(現NCGM)からは、医師、看護師等が派遣され、銃創や地雷創等の治療に当たりました。

1996 | 在ペルー日本大使公邸人質事件



在ペルー日本国大使主催の式典中、武装組織の襲撃にあい、約700名が人質となりました。日本政府は、当時の国立国際医療センター(現NCGM)医師、看護師を含む医療班を現地に派遣しました。医療班は、人質の身体的、精神的な支援を行い、軍の強行突入時に発生した外傷患者の治療等を行いました。

1995 | 阪神淡路大震災



1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災に対し、当時の厚生省は国立病院で組織する複数の医療チームを被災地へ派遣しました。国立国際医療センター(現NCGM)からは、医師、看護師等が神戸市長田区の小学校内に設置された避難所に派遣され、被災者を対象に災害医療活動を展開しました。

1999 | トルコ地震災害



1999年8月にトルコ国西部を震源とする地震が発生し、約15,000名の死亡が確認されました。これに対し、日本政府は当時の国立国際医療センター(現NCGM)医師、看護師を含む国際緊急援助隊医療チームを現地へ派遣しました。被災地では、仮設診療所を設置し、外傷のほか、内科的疾患の治療等を行いました。

2003 | 重症急性呼吸器症候群(SARS)



2002年11月に中国広東省で発生したSARSは、ベトナム、カナダなど多くの国々に拡散しました。日本政府は当時の国立国際医療センター(現NCGM)医師を含む国際緊急援助隊をベトナムと中国に派遣。現地では、感染予防対策指導やモデル病院の設置、在留邦人の健康管理等、多岐にわたる支援を実施しました。

2011 | 東日本大震災



2011年3月11日に発生した東日本大震災に対し、発災6時間後から宮城県仙台市、気仙沼市にDMATを派遣。その後、東松島市に対しさまざまな職種で構成される医療チームや市保健センターに公衆衛生専門家を派遣し、保健医療に関する支援を行いました。また同市と協力協定を締結し、2020年9月現在も支援を継続しています。

2019 | コンゴ民主共和国のエボラウイルス病



2019年6月に同国東部でエボラウイルス病の流行が確認され、WHOは国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態を宣言。この宣言を受け、日本政府は国際緊急援助隊感染症対策チームの派遣を決定し、NCGMからは医師、看護師が参画。現地では、検疫体制強化のための技術支援や感染予防に関する指導を行いました。

2009 | 新型インフルエンザ(H1N1)



2009年4月末にメキシコでH1N1が確認されて以降、世界中に感染が拡大しました。これに対し、成田空港検疫体制の強化を目的に、空港や停留施設における検疫業務の支援を実施。また、国連インフルエンザ調整機関に職員を派遣し、アジア地域の感染拡大防止への支援を行いました。

2017 | コンゴ民主共和国の黄熱病



コンゴ民主共和国政府は、2016年6月に黄熱病の流行を宣言し、国際社会に支援を要請。この要請を受け、日本政府は初の国際緊急援助隊感染症対策チームの派遣を決定し、NCGMからは医師が参画しました。現地では、ワクチン接種キャンペーンや検査の実施に係る技術支援を行い、黄熱病の制圧に貢献しました。

2020 | 新型コロナウイルス感染症



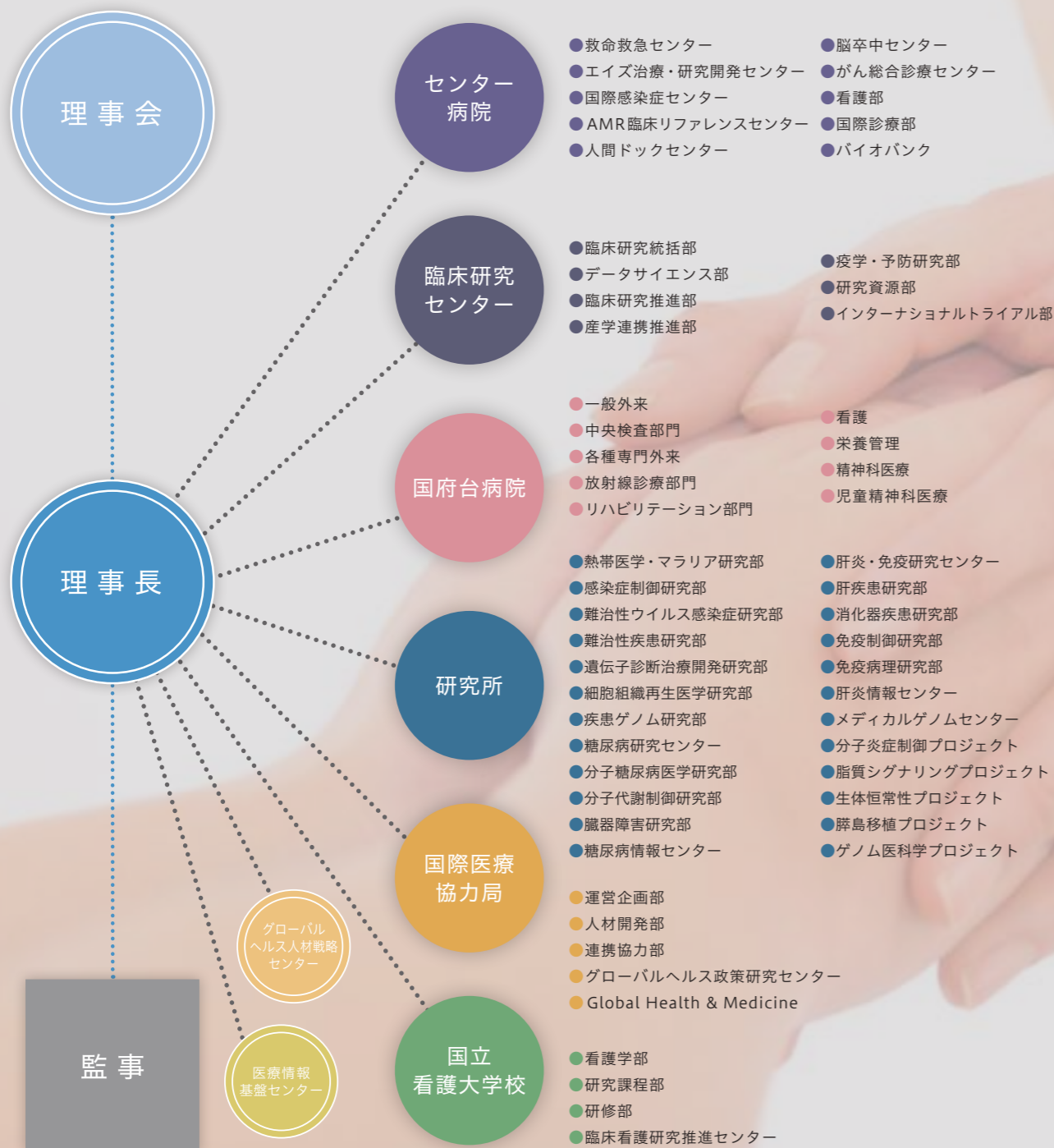
中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に世界中に拡大。NCGMは、武漢からチャーター機で帰国した邦人の健康診断、クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号における感染症対策支援、疑い患者の検査、中等・重症者の受け入れ、行政への専門的助言、軽症者宿泊療養施設の運営支援等、多岐にわたる活動を行いました。

ORGANIZATION CHART

組織図

ナショナルセンターのあるべき理想を目指して。
多種多様な部門が協力し、医療・研究と向き合う。

国立国際医療研究センター(NCGM)は、センター病院、臨床研究センター、国府台病院、研究所、国際医療協力局、国立看護大学校などの各部門で構成されています。NCGMは、高度総合医療を提供するとともに、特に国際的な対応を必要とする疾患に関する診断治療を推進しています。また、これらの疾患や医療の分野における国際協力に関し、調査研究および技術者の研修を総合的に行う国立高度専門医療研究センターです。



センター病院
Center Hospital

センター病院は、国立高度専門医療研究センターとして、感染症から糖尿病・代謝性疾患をはじめとする慢性疾患や難病、さらに、人口の高齢化に伴うさまざまな治療ニーズに対応。また革新的な医薬品や医療機器の研究開発、国際展開を推進し、わが国における国際水準の臨床研究や医師主導治験の中心的役割を担っています。

PAGE 11

臨床研究センター
Center for Clinical Sciences

臨床研究センターは、臨床研究統括部、データサイエンス部、臨床研究推進部、産学連携推進部、疫学・予防研究部、研究資源部として国際ナショナルトライアル部の7部門を擁する組織で、新たな治療法の実現や疾病予防策の提案を行い国民の健康増進に貢献することを目標としています。

PAGE 21

国府台病院
Kohnodai Hospital

2008年4月1日から国立国際医療センター国府台病院として組織再編、2010年4月1日からは独立行政法人化され、国立国際医療研究センター国府台病院となり、地域に開かれた総合病院として高度で先進的な医療を提供するとともに、肝炎・免疫などを主体とした疾患の診断、調査、研究、研修を国内外に提供する役割を担っています。

PAGE 23

研究所
Research Institute

国立国際医療研究センター研究所(NCGMRI)は、わが国の医療分野における国際貢献の拠点研究部門の中核として最初に位置づけられた組織で、1993年に国立病院医療センターと国立療養所中野病院との統合で発足した国立高度専門医療研究センター(ナショナルセンター)内に設置されました。

PAGE 27

国際医療協力局
Bureau of International Health Cooperation

国際医療協力局は、1986年に保健医療分野の国際協力を進めるため国際医療協力部が設置されて以来、あらゆる国の人々が格差なく健康に暮らせる社会を目指し、医療・保健衛生の向上を推進させるため、厚生労働省、外務省、JICA、WHOなど国内外の機関と連携してさまざまな活動を実施しています。

PAGE 31

国立看護大学校
National College of Nursing, Japan

国立看護大学校は、2001年に厚生労働省により、国立高度専門医療研究センターの看護職を養成する教育機関として開設されました。政策医療を担う国立高度専門医療研究センターで求められる臨床看護実践能力と、国際社会に貢献できる能力を併せ持つ看護師、助産師を育成しています。

PAGE 35



センター病院

センター病院は、国立高度専門医療研究センター(2012年に特定機能病院承認)として、感染症(新興・再興感染症、HIV、肝炎等)から糖尿病・代謝性疾患をはじめとする慢性疾患や難病、さらに、人口の高齢化に伴い治療に難渋を極めるがん診療への対応に至るまで、高度先進的な医療を行っています。さらに、受け入れる救急患者数が都内随一であるなど、救急医療にも力を入れています。国際医療協力の立場からは外国からの医師、看護師等の教育訓練を行うとともに、訪日・在日外国人の診療に積極的に取り組んでいます。当院は、わが国でも最も古くからの代表的な卒後教育機関として、研修医、レジデント並びに看護師等の初期教育や卒後教育にも積極的に取り組んでいます。また、国立研究開発法人として臨床研究にも力を注いでいます。



施設概要

病床数 医療法	749床
一般病棟	699床
結核病棟	22床
精神科病棟	24床
感染症病棟	4床

世界の、未来の、高度で先進的な医療に応える充実した設備と体制、そして人材育成

1 診療科目

- 内科
 - 心療内科
 - 外科
 - 精神科
 - 放射線診断科
 - 呼吸器内科
 - 感染症内科
 - 呼吸器外科
 - 小児科
 - 放射線治療科
 - 循環器内科
 - 新生児内科
 - 心臓血管外科
 - 皮膚科
 - 歯科
 - 糖尿病内科
 - 内視鏡内科
 - 消化器外科
 - 泌尿器科
 - 歯科口腔外科
 - 消化器内科
 - 人工透析内科
 - 小児外科
 - 産科
 - 麻酔科
 - 血液内科
 - 緩和ケア内科
 - 整形外科
 - 婦人科
 - 病理診断科
 - 内分泌代謝内科
 - ペインクリニック内科
 - 脳神経外科
 - 眼科
 - 救急科
 - 腎臓内科
 - アレルギー科
 - 形成外科
 - 耳鼻いんこう科
 - リハビリテーション科
 - 神経内科
 - リウマチ科
 - 頭頸部外科
- (全43科)

2 外来案内

外来では、ボランティアの方々が、患者さんの案内・診察手続きなどの質問にお答えしています。また、海外からの旅行者や東京にお住まいの外国人の患者さんの相談にそれぞれの言語でお答えできるように国際診療部を設置するなど、グローバル時代に対応する体制づくりを行っています。

3 電子カルテシステム

当院では新中央棟開棟と時期を同じくして、病院情報システムをオーダリング中心から電子カルテシステムに拡充しました。それにより患者情報や診療情報の部門間での情報共有やシステムによる自動チェックを可能とし、より安全で高度な医療サービスを提供することができます。また蓄積された診療情報は、二次利用のための解析や研究を可能としています。

4 臨床研究

医学は患者さんのさまざまな病気から学ぶことによって進歩してきました。医療技術が進歩した現代においてもその重要性は変わりません。これからも患者さんのご協力をいただき、個人情報の保護に細心の注意を払いつつ、臨床データを収集、分析することによって、明日への医学に役立つ研究やバイオバンク事業を進めていきます。



A 手術室

中央手術室は14室からなり、そのうち1室が感染症手術用陰圧室、6室が鏡視下手術用高機能手術室、3室がバイオクリーンルームとなっています。

B ICU

ICUは10床(1床は陰圧室)からなり、高侵襲手術の術後管理やCCU、そして院内の重症症患者の臓器横断的な全身管理を、集中治療医と各診療科との連携の下で行っています。

C SCU

SCUには6床(9床に増床予定)の脳卒中専用のベッドがあり、多職種からなる医療チームで病態を評価し早期の社会復帰を目指しています。

D NICU・GCU

新生児集中治療室(NICU)6床に加え、新生児回復治療室(GCU)12床を備え、新生児の全身管理を行っています。

E 血管造影・IVR

最新型の血管造影装置3台と各分野の専門スタッフにより、高度な心・血管診断、IVRを行っています。

F 放射線診断

CT、MRI、一般撮影、消化管透視、核医学検査(シンチ、PET)などの各種画像診断を各分野の専門スタッフにより実施しています。

G 放射線治療

強度変調放射線治療、脳定位照射、体幹部呼吸同期定位照射などの最新の放射線治療を行っています。

H 内視鏡

世界最高水準の内視鏡機器を完備し、徹底した感染症防護対策の下、安心・安全な医療をご提供いたします。

I 先端医療

4基のバイオクリーンルーム(BCR)を含む20床の無菌室を有し、造血幹細胞移植、化学療法、免疫抑制療法などを行います。

J 薬剤部

医薬品の調剤・調製のほか、医薬品情報の管理、患者指導、チーム医療への参画など、薬物治療に関するさまざまな業務を行っています。

K 検査部

生理・生化学(緊急)・一般・血液・免疫・病理・微生物・輸血等の各検査業務を実施しています。

L 特別個室病棟

最上階にあるセキュリティ機能を完備した病棟です。ホスピタリティーの行き届いた、快適な入院生活をお過ごしいただけるよう努めています。



救命救急センター

Department of Emergency Medicine and Critical Care



エイズ治療・ 研究開発センター

AIDS Clinical Center (ACC)



救命救急センターは、救急科、総合診療科、集中治療科の3診療科並びに外傷センター、シミュレーションセンターで構成されており、私たちの理念である「高度な総合医療に支えられ、軽症から重症まで、全科にわたる救急患者に24時間対応する、地域中核型総合救急医療施設として、地域住民のニーズを満たす安全な医療を提供し、国の内外の規範となる」ことを実践しています。現在東京都の区西部を中心に、約11%の3次救急搬送を含む、年間約11,000件の救急車搬送患者に対応しています。東京ルールの幹事病院として、救急医療を地域に提供するとともに、災害拠点病院の役割も担っています。

救急医療の現場は、外来部門と病棟部門に分かれ、外来部門は、洗浄室+陰圧隔離室、蘇生室など高度医療に必要な設備が整っています。また夜間も臨床検査技師が勤務しているため、輸血関連や微生物検査、一部の生理検査等も迅速に行われます。病棟部門には高度ICUはもちろん、隔離可能な病床も備えています。さらに病棟内シミュレーション研修室も設置されており、医療安全を目的とした医療従事者の実践的研修に役立っています。



病棟内シミュレーション研修室

ACCは、1997年4月に血友病HIV感染訴訟の和解をもとに、HIV診療の恒久対策と全国のHIV診療の均てん化を目的に設立されました。したがって、血友病HIV感染者に対する十分な救済医療ができるよう包括外来を開設し診療を行っています。もちろん、日本におけるHIV感染症のNational Centerとして、感染経路に関係なくすべてのHIV感染者に対する最先端の医療を提供しています。ACCには、病棟・外来のみならず、臨床研究をサポートするラボ、HIVに特化したコーディネーターナースや心理士とMSWも加わり、まさに包括的なチーム医療を実践しています。ACCの目標は、日本のトップ施設に留まるのではなく、世界のトップ施設への仲間入りを果たすことにあり、HIVおよび併発する感染症の臨床研究に加え、先進国との国際臨床治験やアジア諸国との国際共同研究を数多く実施、欧文一流誌に多くの論文を報告してきました。近年は、感染予防に取り組むSexual Health外来など、HIV感染者の治療のみならず予防医療にも力を入れ、新規感染者ゼロを目指した活動も行っています。



ACCラボでの遺伝子解析

Center Hospital

Center Hospital



救命救急センター入り口



診療の様子



センター病院ヘリポート

救命救急チーム



専門外来診察室はプライバシーに配慮しドアで区切られている



包括外来は救済医療室の外来診療部門



Sexual Health 外来のスタッフ

入院患者のためのカンファレンス



国際感染症センター

Disease Control and Prevention Center (DCC)



AMR 臨床 リファレンスセンター

AMR Clinical Reference Center



国際感染症センター(DCC)は、新興・再興感染症等の国内でのまん延を防止するため、2004年10月に当時の国立国際医療センター内に設置された国際疾病センターを母体に、感染症内科(2011年7月設置)を統合して、2012年5月に新しく設置された部門です。感染症内科、トラベルクリニック、国際感染症対策室、AMR臨床リファレンスセンター(右記)が置かれ、専門性の高い感染症および国内外での感染症の課題に対応するため、感染症の診療・予防・感染症専門家の教育・疫学研究および診断方法・治療薬・ワクチンの研究開発、市民への啓発の面で包括的かつ先進的な取り組みを行っています。DCCの特徴は国立国際医療研究センター内の各分野専門家間との協働体制の下に、臨床現場レベルから研究開発レベルそして医療政策レベルも含めてさまざまな場でその活動を展開していることです。



EASサミット ASEAN首脳会談前の感染症専門家会議

AMR臨床リファレンスセンター(厚生労働省委託事業)は、薬剤耐性(AMR)対策アクションプランに基づく取り組みを推進する目的で2017年4月に設立されました。当センターは3室で構成されており、多彩なスタッフがそれぞれの専門性を活かしてAMR対策に取り組んでいます。臨床疫学室では、医療関連サーベイランスのシステムを構築・運用するとともに、高齢者施設のサーベイランスに取り組んでいます。人の健康を守るには動物や環境にも目を配る必要があるというワンヘルスアプローチの観点からデータ集約も行っています。薬剤疫学室は、全国の抗菌薬使用量サーベイランスを行い、その結果を公開しています。さらに、抗菌薬適正使用に関するデータの収集と解析を行っています。情報・教育支援室は、医療従事者を対象としたセミナー開催や資料の作成など、薬剤耐性や抗菌薬の適正使用についての教育活動を行っています。広く一般の方に向けてもウェブサイトやイベントを通じた情報提供活動を行っています。



NCGMアトリウムでの展示の様子

1 センター病院での業務

感染症診療および支援

総合診療科とともに感染症およびその疑い患者の入院診療、外来診療を行っています。感染症コンサルテーショングループを統括し、院内他科の感染症診療を支援しています。

海外渡航者の包括的診療

あらゆる年齢の方々に海外渡航前の健康診断やワクチン接種などの予防相談から帰国後の診療まで、医療サービスを提供しています。

新興感染症対策

新感染症に備えた院内診療体制の整備、国内外の医療機関の診療支援、新興・再興感染症対策に関する研究を行っています。

2 人材育成

研修会・セミナーの開催

新興・再興感染症や渡航医学、そして予防接種に関する研修会を開催しています。

国際交流

海外から医師などを受け入れ研修を行うほか、海外現地での感染症対策を指導しています。

臨床研修の実施

2010年からエイズ治療・研究開発センター、呼吸器内科と共同で後期臨床研修医(総合感染症プログラム)を受け入れています。また2012年から後期研修後の医師(クリニカル・フェロープログラム)を開始し、毎年3~4名の卒業6年以上の医師を受け入れ、感染症専門医となるための教育を行っています。

3 研究活動

[海外] ベトナム拠点病院群における多剤耐性菌制御に関する研究

[国内] 新型コロナウイルス感染症等の新興・再興感染症や輸入感染症の新規検査法、未承認治療薬、血流感染などに関する多施設共同臨床研究を多数行っています。また新規抗微生物薬に関する医師主導治験を積極的に行っています。渡航関連感染症の疫学研究国際的サーベイランス(GeoSentinel network)に参加しています。



新感染症病棟訓練



研修会の様子



ウェブサイトを通じての情報提供



薬剤疫学室の検討風景



臨床疫学室のスタッフ

小学校で行った教育啓発活動



人間ドックセンター

Medical Examination Center



わが国の人間ドックは、「短期入院精密身体検査」と称して、1954年7月12日に日本で初めて、当センターの前身である国立東京第一病院に発足しました。その後、この健診システムは人間ドックという名称で全国の病院に波及していきました。当院の人間ドックは、長年の実績と経験をもとに、高度専門・総合医療の実践を目指すナショナルセンターの人間ドックとして、より精度の高い人間ドックを目指して、2016年5月に「人間ドックセンター」として生まれ変わり、新たな一歩を踏み出しました。生活習慣病をはじめとする疾患の早期発見や予防を積極的に進めるため、新規開設に合わせて基本コースの検査内容を充実させるとともに、経鼻内視鏡検査の導入、大腸CT検査、膵臓・肝臓ドックの開設、頸部血管の評価や認知機能評価を組み入れた脳ドックの拡充など、斬新な試みを数多く取り入れました。人間ドックセンターは、その後の診療に繋げる体制を強化するため、センター内の各診療科と積極的に連携を図っています。



人間ドックセンターのスタッフ

1 当院人間ドックセンターの特徴

世界の最高水準の医療を目指すセンターの人間ドックとして、最新設備・最先端の医療機器を用い、熟練した技師による精度の高い検査を提供しています。また、人間ドックの報告書は、各領域に精通した診療部門の専門医による判定結果をもとに、診療と予防医学に精通した人間ドック専属の医師が、その後の治療や生活改善に繋がるように、総合的に判断して作成しています。万一病気が見つかった場合、当センターにおいて迅速に精密検査を受け、高度かつ専門的な治療を受けることができる体制を作っています。また、受診された方のご希望によって、他院との医療連携を積極的に行っています。

2 海外からの人間ドック受け入れ

国際化時代の今日、当センターの人間ドックは、グローバルな視点から予防医学を推進するため、受診者は、国内に限らず、国外からも多数受け入れています。海外受診者数実績は国内健診施設では、圧倒的な実績を誇っています。海外からの受診者にも日本人と同様の質の高い人間ドックを提供するとともに、国際診療部と協力して、豊富な海外医療従事者とのネットワークを有効活用し、シームレスな医療連携をすることを目指しています。

3 豊富な追加オプション

当院人間ドックセンターでは、受診される方の希望や都合に合わせて、豊富な追加オプションを揃え、また、「日帰りドック」と「宿泊ドック」を用意しています。悪性腫瘍の早期発見のみならず、動脈硬化性疾患の早期予防を目指した多彩なオプションを追加することが可能です。



宿泊ドック個室



PET-CT 機器



内視鏡検査機器

脳卒中センター

Stroke Center



近年急性期脳梗塞の治療に血栓回収療法が登場し劇的な症状の改善を見込めるようになりました。この大きなパラダイムシフトに対応するため当院は2014年12月に6床のSCUを開設し(2021年4月から9床に増床)、地域で発生した急性期脳卒中の患者さんを24時間365日可能な限り受け入れ、最先端の治療を提供することで地域に貢献しています。このような長年にわたる実績が評価され2019年9月には当院は日本脳卒中学会認定の「一次脳卒中センター」に正式に認定されました。今後は定期的な臨床指標取得による脳卒中医療の質を担保することが求められています。当院での脳卒中診療は脳神経外科医(指導医5名と専攻医2~3名)、脳血管内治療医(指導医1名、専門医1名)、脳神経内科医(専門医3名)、リハビリテーション医、救急医、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、放射線技師、看護師、薬剤師、管理栄養士、MSWなど多職種からなるチームを組み、発症直後から高度な専門治療の提供を可能にしています。



SCU



脳卒中センター専用のリハビリ室

がん総合診療センター

Comprehensive Cancer Center



がんの専門医を中心に関連各科と連携し、薬物療法のみならず、がんと診断された後の健康と生活を支えるがんサバイバースhip支援科、痛みなどのつらい症状を専門的に緩和する緩和ケア科等を擁します。すべての診療科に専門医を有する総合病院の特長を生かし、心臓、腎臓、肝臓などの機能低下、精神・神経疾患、感染症など多様な併存疾患をもつがん患者さんの治療にも対応しています。治療前の臓器機能を中心とした病状を適切に評価し、治療薬の特性に応じた薬物動態等を推測することで、個々の患者さんに即した治療を提供します。安全に抗がん剤治療を実施し、最大の効果を得るためには、がん治療の専門医、緩和医療専門医、がん化学療法認定看護師、がん専門薬剤師等に加えて、多様な副作用への最適な対処ができる各診療科の専門医の知識と経験が必要です。当院では、それらのすべてを兼ね備えており、患者さん一人ひとりに最適な治療と管理を提案し、プレジジョン・メディシンを実現します。

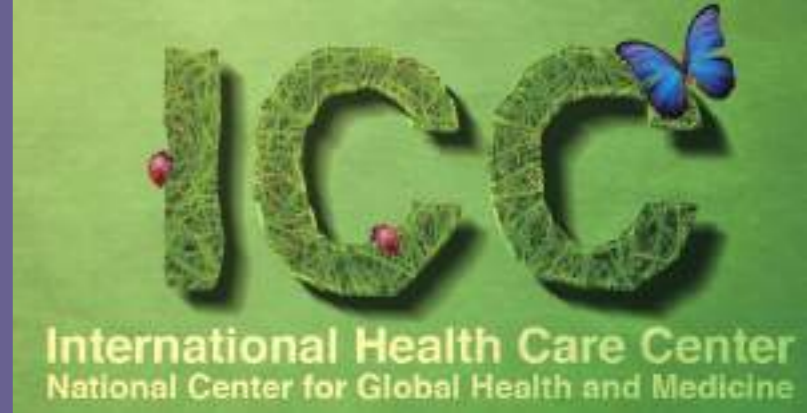
看護部

Nursing Department



国際診療部

International Health Care Center



1 看護部の理念

かけがえのない生命と人間性を尊重し、あたたかい看護を目指します。

3 臨床実践能力の育成と向上を目指して

センター病院は、総合的医療を基盤とする高度急性期病院として、高度先駆的な医療の提供を行っています。看護部では、掲げた理念の下、優れたジェネラリストとスペシャリストの育成に取り組んでいます。「あたたかい看護」が提供できる人材の育成には、職員一人ひとりを大切に、生き生きと看護ができる環境が重要と考えています。質の高い看護実践を目指し、医療安全教育の充実とともに看護職員の臨床実践能力の向上を図っています。また看護の臨床研究を推進し、その支援にも努めています。

2 看護部の目標

1. 安全で質の高い看護の提供に努めます。
2. 看護教育、看護研究を推進し、看護を創造します。
3. 変化する医療に対応できる看護を目指します。



国際診療部は、センター病院の外国人診療を円滑に行うために、外国人患者と40以上ある臨床各科・センターとの調整役を担っています。

短期滞在者や在留外国人で日本語を十分に理解し話すことができない場合や、海外居住者が当院の受診を希望する場合などで、国際診療部の医療コーディネーター(3名)と医療通訳者・翻訳者(約15名:英語、中国語、ベトナム語、ネパール語、ミャンマー語)が、対面で外国人診療のサポートをしています。センター病院を受診する外国人患者数は年々増加しており、2019年度は、外来初診患者数の13.9%(5,656名)、新入院患者数の6.5%(1,163人)が外国人でした。電話・タブレットによる外部委託の医療通訳も用いており、19カ国の言語に対応可能です。

さらに、医療通訳者の育成や情報交換に力を入れており、部内でのOJTや、オンラインを用いた医療通訳者研修会を毎年実施しています。



病院内の外国人医療を円滑に進めるためのオンライン運営委員会

バイオバンク

Biobank



試料の保存作業

バイオバンクとは、細胞・遺伝子・組織等を、研究用の資源として長期間にわたり保管し、不特定多数の医学研究に利用する非営利的な仕組み(研究基盤)です。センター病院(新宿区戸山)と国府台病院(千葉県市川市)で活動している「NCGMバイオバンク」は、将来の診療に役立つ医学研究のために、患者さんのご理解と同意の下、生体試料(血液や手術組織など)および医療情報をご提供いただき、これらを適切な管理の下で保管します。保管された試料等を、現在から将来にわたり計画されるさまざまな研究に活用していくことで、病気の成因や病態の解明、新しい治療薬などの開発が進み、さらに高度な医療を提供できる未来と、疾病の克服に貢献することを目指しています。

また、NCGMを含む6つの国立高度専門医療研究センターでは、より疾患に特化した研究を支えるために連携して「ナショナルセンター・バイオバンクネットワーク(NCBN)」を運営しています。



臨床研究センター

臨床研究センターは、臨床研究統括部、データサイエンス部、臨床研究推進部、産学連携推進部、疫学・予防研究部、研究資源部そして国際ショナルトライアル部の7部門を擁する組織で、新たな治療法の実現や疾病予防策の提案を行い国民の健康増進に貢献することを目標としています。これを達成するために、企業治験に積極的に取り組むとともに、医療現場におけるアンメット・ニーズを拾い上げ、医師主導治験を通して解決を模索しています。さらにワクチン、検査法などの開発から疾患発症予防対策など幅広く研究を進めています。新型コロナウイルス感染症では臨床・研究の中心として社会活動再始動のための先進的、革新的な研究に取り組んでいます。



経験豊富な専門スタッフが国内外の臨床研究を牽引する

1 臨床研究統括部

安全性、倫理性、人材育成という観点から臨床研究に関する支援を実施すると同時に、臨床研究センターとしての支援のあり方を検討し質の向上にも努めています。例えばCCS臨床研究相談チームを組織し運営しています。

3 臨床研究推進部

治験の実施、臨床研究の企画立案や実務の支援を担当しています。NCGMは総合病院として幅広い臨床科を有しているため、各分野での治験実施実績があります。また研究者主導の臨床研究が円滑に実施できるよう多方面の支援を行っています。

2 データサイエンス部

臨床研究の実施に欠かせない生物統計学等のデータサイエンスの研究と教育研修を行うことで、臨床研究の向上を目指しています。また、統計に関する相談やJCRACデータセンターの運用で、研究者を支援しています。

4 産学連携推進部

研究開発における産学官の連携を円滑に進めるために、各種契約、知的財産の権利化や新規研究テーマの立案を支援しています。また、研究者と企業を結ぶイベントの開催や国際的な事業展開を希望する企業に向けた育成も支援しています。

5 疫学・予防研究部

職域大規模コホート研究、ベトナムでの住民コホート研究、医療従事者における新型コロナウイルス抗体調査の事務局として、国民生活への影響が大きい生活習慣病や感染症の実態把握とその予防に関する疫学研究を推進しています。

6 研究資源部

レジストリの構築・運用・利活用の支援を行うクリニカル・イノベーション・ネットワーク(CIN)事業と、新興・再興感染症患者さんの臨床情報及び生体試料の収集・保管・提供を行うナショナル・リポジトリ(REBIND)を担当しています。

7 インターナショナルトライアル部

各国と協力して医薬品・医療機器の研究開発やエビデンス・ベースド・メディスンを推進します。世界の患者により良い医療を提供するため、国際的な臨床研究・治験や人材育成、産学官連携、規制対応などさまざまな活動を通じてグローバルヘルスに貢献します。





地域に、未来に、高度で先進的な医療で寄り添う

こ う の だ い

国府台病院



2008年4月1日から国立国際医療センター国府台病院として組織再編、2010年4月1日からは独立行政法人化され、国立国際医療研究センター国府台病院となり、地域に開かれた総合病院として高度で先進的な医療を提供するとともに、肝炎・免疫などを主体とした疾患の診断、調査、研究、研修を国内外に提供する役割を担っています。

施設概要

病床数 医療法	417床
一般病棟	277床
精神科病棟	140床



1 一般外来

地域に開かれた総合病院として、内科、外科、脳神経外科、心血管外科、整形外科、皮膚科、泌尿器科、婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、麻酔・ペインクリニック科、リハビリテーション科、精神科、児童精神科、放射線科、歯科、救急科を開設し、それぞれの専門医が診療に当たっています。

2 中央検査部門

検査部門は、超音波検査を含む生理検査、微生物検査や輸血検査を含む検体検査、解剖を含む病理検査で構成されています。また検査部門は日本医師会主催臨床検査医学会、日本病理学会および日本臨床細胞学会の研修施設に認定されています。



3 各種専門外来

一般外来に加えて、内科においては総合内科、呼吸器内科、血液内科、感染症内科、糖尿病・内分泌代謝内科、リウマチ・膠原病科、腎臓内科、消化器・肝臓内科、循環器内科、心療内科、脳神経内科等の専門外来も実施し、より専門性を深めた高度な診療を実施しています。

4 放射線診療部門

放射線診療部門では最新の医療機器を用い、最善の総合医療を提供しています。また、地域との医療連携に積極的に取り組み、先進的な医療技術で貢献しています。患者さんに精密な診断が必要と判断された場合、各種の画像診断装置（MDCT、MRI、PET/CT、SPECTなど）を駆使し、迅速で高度な画像診断を実施しています。



地域の人々の健康のために、多角的な視点でニーズに応える



5 リハビリテーション部門

当部門は、理学療法室、(身体・精神)作業療法室、言語聴覚室、デイ・ケア室を置き、すべての疾患別施設基準Iを取得しており、各種身体機能障害患者のQOL向上を担っています。当部門は身体機能障害ばかりでなく、精神疾患患者の機能障害など、多彩な障害の評価と治療に携わるなど、特色のあるリハビリテーションを提供しています。



9 チーム医療

国府台病院は、診療科や部門の垣根が低く、医師・看護師だけでなく、ワーカーや心理士、リハビリスタッフ、管理栄養士や薬剤師等、多職種が連携し、専門性を発揮します。協働することで、患者さんのQOLや意思を尊重したケアを提供できます。また、楽器演奏のアンサンブルチームもあり、地域の皆様に「癒し」も提供します。

6 看護

国府台病院には一般と精神の病棟があり、日々のちとこころに向き合います。患者さんやご家族に「こころとからだを看る看護」を提供できるよう、新人もベテランも率直な意見を交わし、実践・教育・研修・研究を重ねます。児童精神、摂食障害、肝炎・免疫疾患の分野では全国規模の研修を開催し、人材育成の役割も担います。



10 精神科救急と包括的精神科医療

精神科はあらゆる精神障害を対象とする外来診療機能に加え、24時間365日、対応が可能な精神科救急システムが稼働しています。さらに総合病院機能を生かした、身体合併症や複合疾患医療を実施するなど精神科とさまざまな部門が連携しあう包括的な精神科医療を実施しています。



7 栄養管理

すべての疾病治療の基本となる栄養管理に係る栄養食事療法や給食管理をはじめ、生活習慣病・心療内科摂食障害・精神科複合疾患患者等、入院・外来・地域支援システムにおける高度で専門的な個人集団栄養食事指導、臨床栄養研究等多岐にわたり実践しています。



11 救急医療体制と地域医療との連携

一刻を争う救急患者。その受け入れも当病院で積極的に推進しています。医療機関が忘れてはならない救命に対する体制を今後も充実させていきます。また当病院の外来部門では地域医療連携にも力点を置き、高度な検査機能や画像の診断機能、栄養食事指導を提供しています。

8 高度専門・総合医療人の育成

当病院では設備や技術だけでなく、それらを有効活用できる人材の育成にも力を入れています。そのために各セクションでの勉強会はもちろん、部門を超えての研修やセミナーも開催しています。それぞれが高度で専門的なスキルを深めながら、他の専門領域にも関心を持つナショナルセンターのスタッフにふさわしい総合医療人としての能力も高めています。



12 児童精神科医療

国府台病院は1948年から現在まで児童思春期の子どもの治療や支援を行っています。特に児童精神科専用病棟を持つ唯一のナショナルセンターとして、入院治療を含めた臨床活動および児童精神科医の育成の役割も果たしています。また、国内外の専門機関との連携、被災地支援、さまざまな臨床研究なども活発に行っています。





研究所

国立国際医療研究センター研究所 (NCGMRI) は1993年、国立病院医療センターと国立療養所中野病院との統合で発足した国立高度専門医療研究センター(ナショナルセンター)内に設置されました。

NCGMRIは、本邦の医療分野における国際貢献の拠点研究部門の中核として最初に位置づけられた組織で、国際協力を必要とするあらゆる医療分野に関する研究の推進を使命とします。NCGMRIは、開発途上国を中心とする諸外国との国際研究協力を推進するとともに、感染症や栄養障害等の開発途上国で喫緊の課題となっている疾患に関する基礎・臨床研究を病院・国際医療協力局と共同で推進、国内外の研修生を受け入れながら国際的な医療研究の人材育成にも貢献しています。



感染症、糖尿病・代謝性疾患、肝炎・免疫疾患と日夜闘う研究者

特色

NCGMRIは、国際感染症部門、先進医療開発部門に属する14の研究部、5つのプロジェクト研究、および3つの研究センターと2つの情報センター、共通実験・機器室、動物実験施設、およびRI実験・管理室で構成され、36名の部長、室長およびプロジェクト長と80名の上級研究員、研究員等を含めた総勢約180名が研究に従事しています。

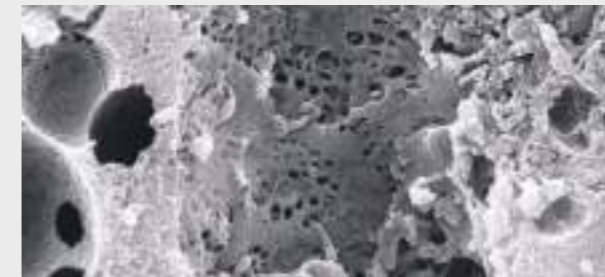
国際感染症部門は「新興・再興感染症における診断法・新規治療薬の開発と疫学・臨床研究」、先端医療開発部門は「先端技術を駆使した先進医療の開発、臨床部門と連携した橋渡し研究」を主要な研究対象として努力を続けています。

糖尿病研究センターは「糖尿病と合併症の解明・克服、標準治療の確立と均てん化」を、肝炎・免疫研究センターは「肝炎・肝臓と免疫疾患の解明・克服、肝疾患診療の均てん化」を、メディカルゲノムセンターは「ゲノム医療の開発・臨床応用」を主たる研究として展開しています。

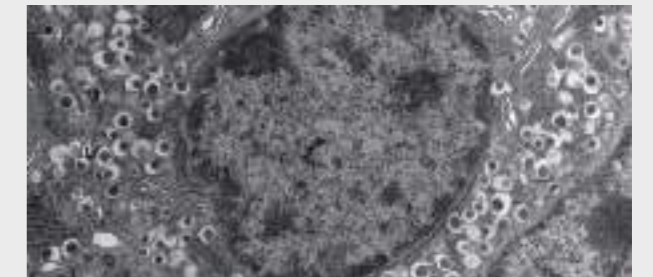
2019年末の新型コロナウイルス感染症のアウトブレイクでは、病院との緊密な連携の中で新たな研究がスタートし、研究所における感染症研究の機動性と高い専門性を改めて示しています。

構成部門

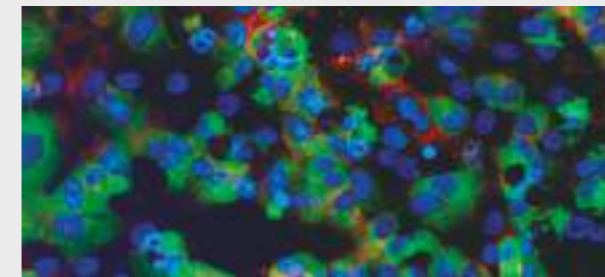
- 熱帯医学・マラリア研究部
- 感染症制御研究部
- 難治性ウイルス感染症研究部
- 難治性疾患研究部
- 遺伝子診断治療開発研究部
- 細胞組織再生医学研究部
- 疾患ゲノム研究部
- 糖尿病研究センター
- 分子糖尿病医学研究部
- 分子代謝制御研究部
- 臓器障害研究部
- 糖尿病情報センター
- 肝炎・免疫研究センター
- 肝疾患研究部
- 消化器疾患研究部
- 免疫制御研究部
- 免疫病理研究部
- 肝炎情報センター
- メディカルゲノムセンター
- 分子炎症制御プロジェクト
- 脂質シグナリングプロジェクト
- 生体恒常性プロジェクト
- 脾臓移植プロジェクト
- ゲノム医科学プロジェクト



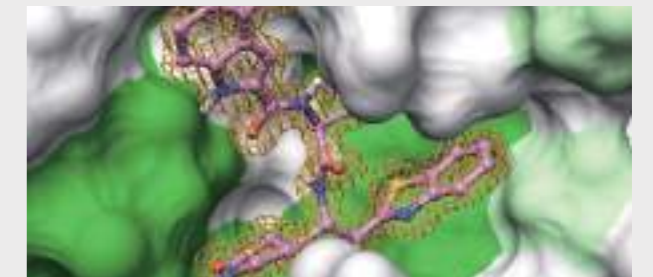
正常マウス肝類洞内皮細胞の電子顕微鏡写真



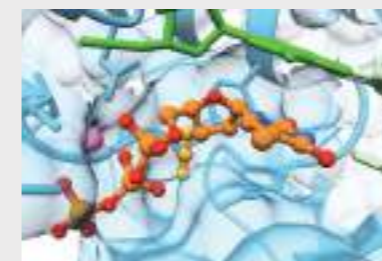
膵島β細胞の電子顕微鏡写真
細胞質に多くのインスリン顆粒を認める



SARS-CoV-2に感染したVeroE6細胞で増殖したSARS-CoV-2は免疫染色で緑色に、細胞核は青く染まって見える



SARS-CoV-2のプロテアーゼ (MP^{pro}) 阻害剤はMP^{pro} に結合してSARS-CoV-2の増殖を阻止する



最初のエイズ治療薬AZTはHIVの逆転写酵素に特異的に結合してHIVの増殖を阻止する



わが国の院内感染の原因となっている高度多剤耐性緑膿菌



ヒト赤血球に寄生するマラリア原虫

糖尿病研究センター

Diabetes Research Center



肝炎・免疫 研究センター

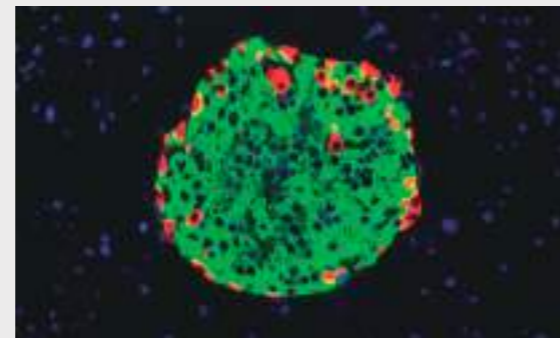
The Research Center for Hepatitis and Immunology



糖尿病研究センターは、糖尿病の成因解明、新しい診断・治療法の開発というミッション達成に向けて、2010年に設立されました。

当センターは、分子糖尿病医学研究部、分子代謝制御研究部、臓器障害研究部の3研究部と膵島移植プロジェクトチーム、および、人材育成・情報発信・政策研究を担当する糖尿病情報センターを擁し、上記の目的を達成するために糖尿病の基礎研究、J-DOIT3やPRISM-Jなどの臨床研究、J-DREAMS等の大規模レジストリ研究と、各階層における研究に取り組み、その成果を社会へとフィードバックすべく統合的に事業を推進しています。

病院における診療活動と研究所における研究活動を有機的に橋渡しするとともに、糖尿病に関する情報発信の役割を担い、わが国における糖尿病研究・診療の中心的拠点として一層発展するべく努力していきます。



インスリンを分泌する膵臓ランゲルハンス氏島の免疫組織染色

ウイルス性肝炎は国内最大級の感染症です。肝炎は適切な治療を行わないまま放置すると慢性化し、肝硬変・肝がんへと進行するおそれがあり、患者救済、医療費抑制の観点から国をあげての対策が求められています。肝炎・免疫研究センターは、4つの研究部（肝疾患、免疫病理、免疫制御、消化器疾患）、ゲノム医科学プロジェクト、肝炎情報センターから構成されています。肝臓、免疫、ゲノム分野における国内トップクラスの人材および研究機器を有し、世界でも最先端の研究を遂行しています。各研究部では、ウイルス性肝炎、肝硬変・肝がん、自己免疫疾患、アレルギー疾患などの病態解明を通して診断法と治療法の開発を行い、国民の健康福祉に貢献することを目指しています。肝炎情報センターは肝炎対策基本法に基づき設置された機関であり、厚生労働省、全国自治体、全国肝疾患診療連携拠点病院（71施設）と連携し、肝炎医療の均てん化と肝炎政策の推進に携わっています。



細胞培養実験

最新の研究設備



研究室風景



PRISM-Jプロジェクト 参加者への説明会



J-DREAMSプロジェクト



全国糖尿病週間・世界糖尿病デーに合わせて開催される糖尿病啓発イベント

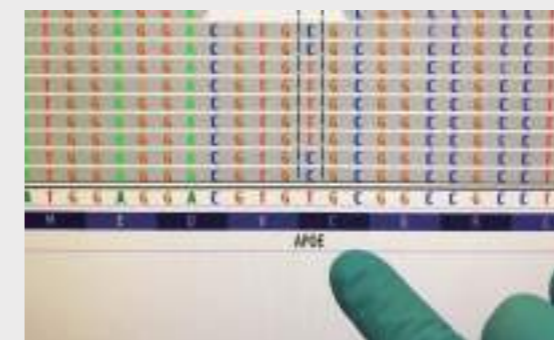
糖尿病の新規治療法開発に向けたミーティング

メディカル ゲノムセンター

Medical Genomics Center



センター病院 臨床ゲノム科での遺伝カウンセリング



ゲノムバリエーション情報の臨床的解釈

近年、従来型医療から精密医療へのパラダイムシフトが唱えられ、ゲノム医療は、その中核をなすアプローチと位置づけられます。メディカルゲノムセンター（MGC）は、国立国際医療研究センターのゲノム医療開発・推進組織として、2016年4月に発足しました。MGCは医学研究と臨床活用の両方を行う組織であり、センター病院臨床ゲノム科と連携して実地医療に寄与しています。従来、遺伝子検査、遺伝医療という言葉が汎用されてきましたが、大まかに言えば、その発展版が、ゲノム検査、ゲノム医療です。遺伝子検査は、特定の遺伝子のDNA断片を調べるもので、主に遺伝性疾患を対象とします。一方、ゲノム検査は、ゲノム情報を対象にして、注目する病気に関わるバリエーション（群）を網羅的に探索するもので、対象疾患も次第に広がってきています。MGCは、国内外のゲノム研究開発やゲノム医療の進捗状況に合わせて、多様な課題に対し、戦略的、かつスピード感をもって取り組んでいきます。



国際医療協力局

国際医療協力局は、あらゆる国の人々が格差なく健康に暮らせる社会を目指し、医療・保健衛生の向上を推進しています。1986年に保健医療分野の国際協力を進めるため国際医療協力部が設置されて以来、厚生労働省、外務省、JICA、WHOなど国内外の機関と連携してさまざまな活動を実施しています。これまで政府開発援助による技術協力プロジェクトを展開した国は26カ国、受け入れた研修員は160カ国以上から約6,000名にのぼります。近年、感染症や母子保健、保健システム強化に加え、非感染性疾患や高齢化、公衆衛生危機対応の取り組みが増えています。また、SDGs（持続可能な開発目標）やUHC（ユニバーサルヘルスカバレッジ）の推進が重視される中、分野横断的で包括的なアプローチによる国際保健医療協力を展開しています。



意識・行動・発信、生きる力をともに創る

1 革新的な国際保健医療協力

低中所得国をはじめとする、あらゆる国や地域の公衆衛生危機、健康課題の解決と健康格差縮小のための技術協力を総合的に展開しています。また、企業、NPO、国際的なパートナーシップなど幅広い関係者と連携し、革新的な国際保健医療協力を推進しています。

2 グローバルヘルス領域のシンクタンク機能

グローバルヘルスに関する知見や経験をもとに政策を提言し、日本のグローバルヘルス外交に協力しています。また、WHOをはじめとする国際機関等の専門家会議に委員を派遣しています。さらに、WHO協力センターとして知見の共有、国際会議等を通じた知見の発信を行っています。

3 グローバルヘルスの潮流を踏まえた人材育成

低中所得国からの研修員を対象に、さまざまな健康課題や公衆衛生危機等に対応できる人材を育成し、そのネットワークを構築しています。また、グローバルに活躍できる日本人の保健医療人材を育成するため、実践的な講座や研修コースを国内外の機関と連携して提供しています。

4 グローバルな健康・医療の課題に関する研究

国内外の連携機関やさまざまなネットワークを戦略的に活用し、グローバルヘルスの課題に資する研究を推進しています。また、国際保健医療協力を効果的・効率的に実施するため、低中所得国に特有の健康課題や保健医療サービスについて、フィールド研究や政策研究を行っています。

5 健康・医療に関する国際展開

日本の医療制度に関する経験の共有、医療技術の移転や高品質な日本の医薬品、医療機器の国際展開を推進することにより、日本の医療分野の成長を促進しつつ、対象国の保健医療システムの発展を通して、公衆衛生および医療水準の向上に貢献しています。



ベッドサイドでの医療安全推進



住民への健康教育



黄熱病に対する予防接種指導



看護教育に関する海外研修員受け入れ



フィールドでの疫学調査



がん早期発見のための技術移転



日本人対象の国際保健に関する研修



国際会議にて日本の意見を主張



世界保健総会にてUAE保健基金賞受賞

グローバルヘルス 政策研究センター(iGHP)

Institute for Global Health Policy Research



グローバルヘルス 人材戦略センター

Human Resource Strategy Center for Global Health



1 iGHPの理念

「健康先進国」としての知見や実績の世界への発信と人材育成を目的に、グローバルヘルス政策の研究推進機関として、2016年10月に「グローバルヘルス政策研究センター(iGHP)」は設立されました。

2 iGHPのミッション

- ・グローバルヘルス政策に関する科学的エビデンスの構築
- ・ヘルスシステム、対策評価、外交・ガバナンスに関する研究
- ・グローバルヘルス政策研究に携わる多様な人材の育成
- ・日本へ、そして世界へ向けての政策提言

3 国際的な医療政策の向上を目指して

これまで、日本では大学、研究機関等で国際保健やグローバルヘルス関連の研究が行われてきましたが、欧米に比べてその研究拠点の数や規模は大きくないのが現状です。そのため、グローバルヘルスを推進するためのさまざまな対策の医学、保健学、福祉学、疫学、社会学、経済学、医療人類学等の観点からの評価研究、政策や外交への提言、そしてそのための人材育成が組織的に行われてこなかった現状があります。

iGHPのミッションは、グローバルヘルス政策を進めるための科学的エビデンスの構築と国内外への発信、政策提言、人材育成です。iGHPは3研究科が密接に協働し、関連する国内外の諸機関とも連携しつつ、さまざまなプロジェクトを進めています。



グローバルヘルス人材戦略センター(HRC-GH)は、国際機関における日本人のプレゼンスを高めるため、厚生労働省大臣官房国際課の委託事業として、2017年9月21日に事業を開始しました。HRC-GHは、ライフサイクル・キャリアディベロプメント・アプローチを通じたわが国の国際保健政策人材の拡大と能力強化を戦略的に推進し、国際保健課題に貢献することをミッションに掲げています。その主な活動は、わが国の国際保健政策人材の養成と国際機関への派遣です。人材登録・検索システムへの登録による空席情報の提供、個別進路相談、受験対策ワークショップの実施、セミナー・講演会の実施などを通じて、国際機関への日本人の採用者、昇進者を毎年着実に増加させています。

URL: <https://hrc-gh.ncgm.go.jp>
 人材登録・検索システム: <https://hrc-gh-system.ncgm.go.jp/>
 E-mail: HRC-GH@hosp.ncgm.go.jp



ワークショップ講義風景(東京会場)



ワークショップでのグループディスカッション(大阪会場)



センター外観



会議の様子



執務室



セミナー

Global Health & Medicine



Global Health & Medicine (英文誌)
 Print ISSN : 2434-9186 ; Online ISSN : 2434-9194



Global Health & Medicine (GHM) は令和の幕開けとともに誕生した、NCGMが発行する国際英文ジャーナルです。

GHMは、NCGMが関わる臨床医学、基礎医学、公衆衛生学、国際保健学などの分野において、国際的な情報ネットワークの構築と高品質なオリジナル研究公表の場を提供することを目指しています。また、国内外より広く投稿を受け付けており、掲載された論文はすべてPubMedで閲覧することができます。NCGMはGHMを発行することにより、健康と医療・医学の進歩と発展に貢献し、世界に情報を発信したいと考えています。

URL: <https://www.globalhealthmedicine.com>
 E-mail: office@globalhealthmedicine.com

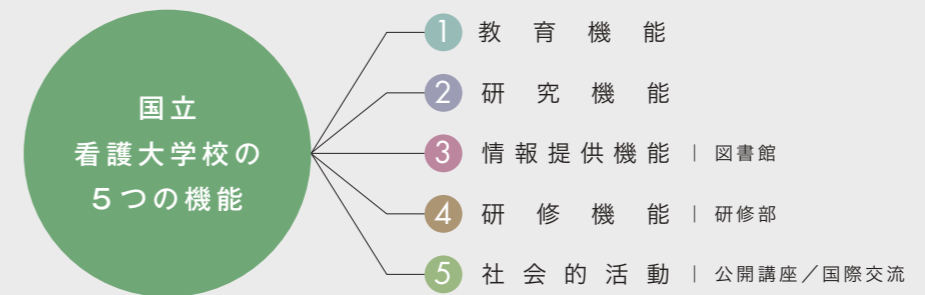


国立看護大学校

国立看護大学校は、2001年に厚生労働省により、国立高度専門医療研究センターの看護職を養成する教育機関として開設されました。「心と心が通い合う、人間的な看護」というヒューマンケアの理想を基盤に、政策医療を担う国立高度専門医療研究センターで求められる臨床看護実践能力と、国際社会に貢献できる能力を併せ持つ看護師、助産師を育成しています。政策医療と国際医療について同時に学べる点が本学の大きな特長です。さらに、2005年には大学院修士課程に相当する研究課程部前期課程（現在は専門看護師教育課程を含む）、2015年には博士課程に相当する後期課程を設置し、政策医療看護学の発展に寄与するとともに高度実践看護職の育成に力を入れています。



国際感覚にあふれ 豊かな人間性を育み 新たな看護を切り拓く



看護学部

看護師および助産師を養成する4年制の看護基礎教育機関です。独立行政法人大学改革支援・学位授与機構への申請により卒業時には学士（看護学）が授与されます。

学部および学科	看護学部看護学科
総定員	400人(1学年100人)
修学年限	4年間
学位	卒業時申請により大学改革支援・学位授与機構から学士（看護学）の学位が授与されます。

研究課程部

大学院の修士・博士課程に相当し、研究能力と高度な臨床実践能力を兼ね備えた看護職を育成します。政策医療看護学の推進という他の看護系大学院にはない特色と役割を担っています。

学生数	前期課程	30名(1学年15名)
	後期課程	9名(1学年3名)
修学年限	前期課程	2年間
	後期課程	3年間
学位	独立行政法人大学改革支援・学位授与機構に申請し修士論文、博士論文の審査および試験に合格すると、「修士（看護学）」「博士（看護学）」の学位が授与されます。	

研修部

国立高度専門医療研究センター・国立ハンセン病療養所および独立行政法人国立病院機構の各病院に勤務する看護師等を対象に、実習指導者講習会および看護研究法や看護に関する最新の知見についての短期研修などを多数実施しています。

- 研究課程部 専門分野
- 政策的機能看護学領域
国際看護学／看護教育学／看護情報・管理学
 - 先駆的臨床看護学領域
成人看護学／精神看護学／成育看護学／長寿看護学／感染管理看護学
 - 専門看護師教育課程
がん看護／精神看護／小児看護／感染症看護

臨床看護研究推進センター

国立高度専門医療研究センターにおける臨床看護研究の推進に向けた活動を行っています。

心と心が通いあうヒューマンケアの理想を求めて

本学では、1年次に看護の基本となる人間理解のため、主に人間科学、関係性に関する科目を学び、4年間を通じて、人間の成長発達や環境との関係を理解しながら、看護の専門知識と技術を学び、これらを有機的に統合させます。これにより、豊かな人間性を育むとともに、高度な看護実践能力と国際感覚を養います。



アクセス



国立国際医療研究センター病院
Center Hospital of the National Center for
Global Health and Medicine

国立国際医療研究センター 研究所
Research Institute

国立国際医療研究センター
国際医療協力局
Bureau of International Health Cooperation

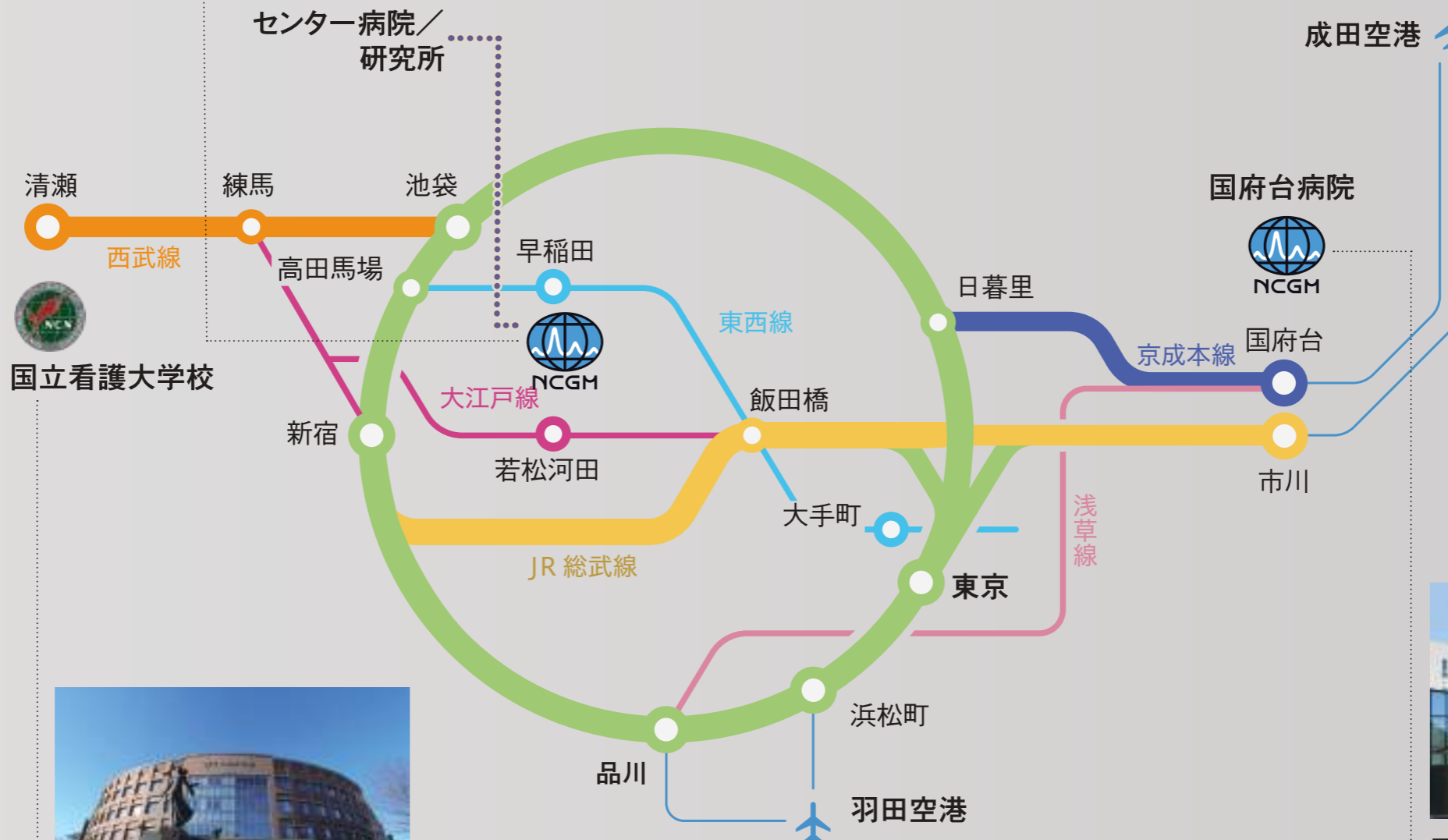
臨床研究センター
Center for Clinical Sciences



センター病院・研究所

Center Hospital of the National Center
for Global Health and Medicine / Research Institute

〒162-8655
東京都新宿区戸山1-21-1
TEL:03-3202-7181(代)



国立看護大学校

National College of Nursing, Japan

〒204-8575
東京都清瀬市梅園1-2-1
TEL:042-495-2211(代)



ロゴマークについて

国際分野における国際的なセンターであることを象徴し、世界の人々の健康を守る強い願いを青い地球の中の生命の鼓動として表現したものです。



成田空港

国府台病院



国府台



国府台病院

Kohnodai Hospital of the
National Center for Global Health
and Medicine

〒272-8516
千葉県市川市国府台1-7-1
TEL:047-372-3501(代)

国立国際医療研究センター
国府台病院
Kohnodai Hospital of the
National Center for Global Health and Medicine

国立国際医療研究センター 研究所
肝炎・免疫研究センター
The Research Center for Hepatitis and Immunology

